

南米伝統の笛の音で日本を元気に セサル・ティコナさん

きらり感彩人

2023/5/21 2:00 | 日本経済新聞 電子版



ペルー人のセサルさんは「日本人に元気をもらった」と語る

JR大阪駅前の路上。せかせかと歩く人たちが笛の音に足を止め、ペルー人のセサル・ティコナさん（47）の演奏に見入っている。セサルさんは南米アンデス地方の伝統的な笛、ケーナとサンポーニャの奏者だ。その雄大な音色は日々せわしく生きる現代人に安らぎと明日へのエネルギーを与えている。

来日して26年になる。ペルー南部の都市アレキパの出身で、サンポーニャに初めて触れたのは14歳のとき。以来、音楽の奥深さにはまり大学でも音楽を専攻した。セサルさんの演奏に感銘を受けた在日ペルー人の知己の誘いを受け、大阪に来た。

当時は日本語が一切分からない上に文化の違いもあり、「初めは不安だった」と振り返る。だが事あるごとに助言をしてくれたり、ライブで差し入れをしてくれたりする日本人

が周りにいて、異国の生活に少しずつ慣れていった。

今では大阪を中心に全国のイベントやライブハウスなどで公演する。これまでに7枚のCDを出し、国連児童基金（ユニセフ）のチャリティーコンサートで演奏したこともある。日本における南米音楽の草分け的存在として活躍してきた。

「大阪人は気質的にラテンアメリカの人によく似ているので安心する」と話す。知り合いの中には「セサル太ったなあ」と冗談を交えて話してくれる人もいる。「みんなフレンドリーでとても楽しい」とセサルさんは笑みを浮かべる。

セサルさんの目には「日本人は仕事などでストレスを抱える人が多い」と映り、「故郷の伝統音楽で少しでも多くの人が元気になってくれたら」と話す。ある女性ファンからは「セサルさんの演奏を聴くと、忙しい日常から離れられ、自分を取り戻せる」と感謝されたこともある。

演奏会ではペルーの文化や食事についても紹介するよう心がけている。ファンの中にはそれがきっかけでペルーを訪れる人もいるといい、両国の架け橋となっている。

「日本人に元気をもたらしたから私も彼らに元気を与えたい。音楽は人と人の心をつなぐ」。人生の半分以上を日本で過ごし愛する妻・由巳子さんとも出会えた。これからも大阪で暮らし続ける。（山下宗一郎）



セサルさんは日本で南米音楽の普及に取り組んできた



本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

NIKKEI Nikkei Inc. No reproduction without permission.